



第4章

関係諸団体の紹介

たくさんの協力を得て

日本盲導犬協会は、これまで多くの方々、多くの団体の皆様に
多大なるご協力とご支援をいただいております。

当協会がここまで発展したのは、そうした方々の誠実なご尽力があったからこそです。

今後、一層多くの視覚障害者を支える手が必要となります。

さらに多くの方々と手を携えることができれば幸いです。



盲導犬とともに歩んできた ユーザーたちの活動を支える

ユーザーの会

当協会の50年の中で、多くの活動が誕生しました。

なかでも盲導犬とともに歩むユーザーたちの活動は活発です。

1989年に「横浜あゆみ荘」での出会いから生まれたユーザー会は、「えみの会」へと改名、

その後2003年には「日本盲導犬協会ユーザーの会」として再発足し活動は今も続いています。

訓練センター卒業生の 同窓会として発足

1989年(平成元年)8月、当協会の訓練センターで共同訓練を終えた“卒業生”の一人池ヶ谷勝美さんは同窓生に「同窓会開催のお知らせ」を送りました。この手紙には「私たちはパートナーである盲導犬を手にして、関係者のご苦勞をよそに生活していてよいのだろうか。当事者である私たちが何かをしなければならないのではないか」とありました。

この呼びかけで、同年11月に横浜の障害者宿泊施設・横浜あゆみ荘でささやかな同窓会が開かれました。池ヶ谷さんの思いに共鳴して集まった参加者は、ユーザーとその家族、当協会職員など合わせて約20人。ともに食事をし、カラオケを楽しみ、夜更けまで話に花を咲かせ、すっかり意気投合し、翌日は中華街や山下公園を散策するなど、大いに親睦を深める集まりとなりました。

翌年2回目の同窓会が開かれ、会の名前を「あゆみの会」と命名しました。横浜あゆみ荘にちなんでの命名でしたが、一步一步自分の足で歩むという意味も込められていました。

これを機に、同窓生と当協会、同窓生同士のつながりをより一層緊密にして親睦を深め合うことを目的に、定期的に会を開くことになりました。

「あゆみの会」正式結成で 活動も活発に

1992年(平成4年)2月9日、東京・新宿の全国障害者総合福祉センター・戸山サンライズにおいて、念願の「あゆみの会」結成総会が開かれました。当日は長

崎、島根、静岡、山梨、神奈川、東京、千葉の各地域から、盲導犬とそのユーザー、家族、当協会関係者、パピーウォーカーなど34人が集まりました。

会の発足を受けた当協会では、卒業生の中からこのような積極的な社会参加の動きが起こったことを大きな喜びとして歓迎し、視覚障害者の方々が自ら始めた新たな動き——盲導犬ユーザーと協会、そして賛助会員を結ぶ新しい動きとして、その活動をバックアップするために助成金を出すことにしました。

総会では、呼びかけ人であった池ヶ谷勝美さんが会長に、また他の役員の選出も行われました。活動方針として、総会の開催、年2回の親睦旅行、名簿の作成、会報『ガイド・ドッグ』の発行、さらに「盲導犬普及キャンペーン」への協力なども話し合われました。

1993年2月28日には「あゆみの会」の親睦旅行として、当協会スタッフやボランティアとともに、栃木盲導犬センターや東京ディズニーランド(千葉県浦安市)を訪れました。

東京ディズニーランドでは、報道陣も多数訪れる中、参加者は不安と期待を胸に盲導犬とともに入場、ミッキーやミニーマウスの歓迎を受けました。記念撮影後は、アトラクションへ。ジャングルクルーズへの乗船ももちろん盲導犬と一緒にです。当初の不安は吹き飛び、盲導犬と一緒に歩けたことへの喜びと楽しいアトラクションに大満足の日となりました。

会名を 「えみの会」に変更

1994年(平成6年)の4月には3日間の日程で、栃木県那須のリゾート施設・くろばねスプリングスで親睦会が行われました。

さらに同年6月にも3日間の親睦旅行が実施されま



初めての同窓会を開催した「横浜あゆみ荘」
出典：えみの会10周年記念誌



「あゆみの会」親睦旅行(1992年)



「えみの会」で東京ディズニーランド訪問
出典：えみの会10周年記念誌



「えみの会」で栃木県那須のリゾート施設へ(1994年4月22～24日)

した。このとき使用した施設は「あゆみの会」の名の由来でもある「横浜あゆみ荘」でした。総会初日に、役員の改選や事業、収支報告などが行われましたが、加えて会名である「あゆみ」という名称が、他の団体と紛らわしいとの指摘を受け、会名を変更することになったのです。

役員一同で熟考を重ねた末、最終的に「えみの会」に改めることで決まりました。「えみ」の由来は、当協会の元事務局長であった広瀬エミ子さんのお名前から。

広瀬さんは、当協会設立以来、協会およびユーザー、そして盲導犬のために誠心誠意尽くされた方でしたが、

残念なことにこの年の2月に亡くなりました。この広瀬さんのことをいつまでも忘れずにいるために、そして会員同士“ほほ笑み”をいつも絶やさずにいようという願いを込めて、会名を「えみの会」にしたのです。

横浜あゆみ荘で行われた総会の翌日は、参加者全員で伊豆修善寺の虹の郷に場所を移し親睦を深め、最終日には盲導犬フォローアップ教室も開かれました。



「全日本盲導犬使用者の会」発会式で
会長就任のスピーチをする清水さ
ん。たくさんのユーザーと盲導犬が
一堂に会するのは初めて



神奈川訓練センターで「日本盲導犬協会
ユーザーの会」総会開催(2015年)

全国の盲導犬ユーザーが結集する 「全日本盲導犬使用者の会」発足

1994年(平成6年)11月23日、東京・新宿の全国障害者総合福祉センター・戸山サンライズで「全日本盲導犬使用者の会」の発会式が行われました。

当日は、全国から盲導犬ユーザーと使用を希望している視覚障害者が70人ほど、そして盲導犬が50頭という大集合の発足式となりました。

当協会の「えみの会」と同様、国内の各盲導犬育成施設にはそれぞれの卒業生による同窓会はありましたが、全国の盲導犬ユーザーが集結する会は存在していませんでした。ユーザー同士の交流を深め、悩みを話し合ったり、互いに協力して問題の解決にあたったり、そして

社会への啓発活動なども行いたい——そのためには全国のユーザーが結束しなくてはならない、との思いから以前より発足の準備が進められてきたのです。

そんな思いが実を結び、発会時点ですでに当時の盲導犬使用者数約800人の3割近くに当たる225人の入会者を数え、晴れてこの日を迎えることができました。

会長には広島県盲学校教諭で盲導犬ユーザーの清水和行さんが選ばれ、「えみの会」を立ち上げた池ヶ谷勝美さんも役員として事務局長と企画調整部長を務めることになりました。

記念式典では、厚生省(当時)や警察庁、視覚障害者団体、盲導犬訓練施設代表など多くの来賓の祝辞があり、「盲導犬の現状と課題」というテーマの発会記念シンポジウムも開かれました。

悲しい出来事にも負けない 会の強い結束

「あゆみの会」、そして「えみの会」へと名を変えて交流を深める活動を続けていた同窓会でしたが、悲しい出来事が起こりました。「あゆみの会」の結成総会から3年目の1995年5月6日、会の呼びかけ人であり初代会長でもあった池ヶ谷勝美さんが不慮の事故で帰らぬ人となったのです。

池ヶ谷さんを失ったことは、全国の盲導犬ユーザーには多大な損失でした。メンバーは深い悲しみに包まれましたが、彼女の遺志を継いでいくことこそ残された会員に課された使命であるとの思いに立ち、それまで副会長であった吉川勝彦さんが会長代行を務めることになりました。

その月に予定されていた赤倉温泉(新潟県)、戸隠(長野県)、伊香保(群馬県)への親睦旅行も、池ヶ谷さんの逝去によりいったんは中止が検討されました。しかし、この旅行で行われる予定の新潟県盲導犬ユーザーの会との交流は故人も願っていたことでもあったため、中止されることなく実施されました。なお、総会(同年7月2日)後には池ヶ谷さんを偲ぶ会が開かれ、多数の出席者が故人の冥福を祈りました。

その後も1996年の仙台への研修旅行、1997年の栃木県盲同窓会「瞳の会」との合同研修など、毎年積極的に活動を続けてきました。1997年には母校の訓練センターが神奈川県横浜市に新設され、「えみの会」事務所も新センター内に開所、1998年には今井園児さんが3代目の会長に就任されました。

「えみの会」から 「日本盲導犬協会ユーザーの会」へ

2000年(平成12年)には設立10周年を祝って記念誌も発行されたのですが、翌年に転機が訪れます。当時起こった訓練士離脱問題に巻き込まれ、会の運営が停止、事実上解散という事態に陥ってしまったのです。

しかし、ユーザーからは再び会を立ち上げたいとの要望が強く、有志が集まり準備委員会を設置します。打ち合わせと検討を進めた結果、「日本盲導犬協会ユーザーの会」に改名して正式に再出発することが決定されたのです。

2003年(平成15年)8月31日、当協会の神奈川訓練センターに隣接する横浜らいずで「日本盲導犬協会ユーザーの会」発会総会が開催されました。全国各地からユーザーと盲導犬が出席、役員の選出が行われ新たなスタートを切ることとなりました。

日本盲導犬協会ユーザーの会はその後も活発に活動を続けます。2004年には新潟、2005年には仙台・山形などへの研修旅行を重ねる中で交流を深めていきました。2014年には香川県高松市で当協会と合流しての街頭募金活動を行ったり、2015年には富山市内をパレードしたりと、単なる親睦にとどまらず、全国各地で視覚障害者と盲導犬への理解を呼びかけるなど、毎年積極的な活動を行っています。

最近では、盲導犬歩行ワークショップも積極的に開催しており、当協会とユーザーとの協力・連携を深めながら、盲導犬ユーザーを取り巻く社会環境の向上に向けて活動を続けています。

DATA file

あゆみ

- 1989年11月 初会合
- 1990年 「あゆみの会」命名
- 1992年 2月 「あゆみの会」結成総会開催
- 1994年 6月 「えみの会」へ改称
- 11月 全国の盲導犬ユーザーが集結する
「全日本盲導犬使用者の会」発足
- 2000年 「えみの会」設立10周年
- 2003年 8月 「日本盲導犬協会ユーザーの会」に
改称。発会総会が開催

盲導犬育成事業の存在感を高める ボランティアとその組織

ボランティアの会

当協会の事業は、多くのボランティアによって支えられています。

盲導犬育成事業は、さまざまな場面で支えてくださるボランティアの皆様の協力なくしては成り立たないことが特徴です。当協会のボランティアは「ボランティアの会」の会員となり、ボランティアと協会が協調・協働して事業の充実をはかっています。

ボランティアの支えなくしては 成り立たない盲導犬育成事業

良い盲導犬とは、人と暮らすのが苦にならず、むしろ楽しめる犬です。人間社会のルールを学び、人が好きな犬に育てるには、犬飼育ボランティアの存在なくして成り立ちません。また、盲導犬が社会に受け入れてもらえる環境をつくるための、盲導犬への正しい理解促進活動にもボランティアの協力は欠かせません。

当協会には、毎年多くのボランティアに登録していただいており、2017年の登録者は約3,000人にのぼります。ボランティア相互の親睦を図るために、協会と各種ボランティアの代表からなるボランティア委員会が運営しています。

ボランティアの集い 「あい☆ボの会」発足

2002年(平成14年)4月、犬飼育ボランティア有志により、「あい☆ボの会」が発足しました。当時、訓練士離脱問題で混乱する育成現場に対し、より良質な盲導犬育成のために、相互交流を密にして積極的に協力していこう、というボランティアの集まりです。同年6月には、盲導犬ユーザーの講演をはじめ、情報交換会が行われました。その後、11月には「ボランティアの会」となり、協会役職員と各種ボランティアの代表から構成される「ボランティア委員会」がボランティアの会を運営することとなり、現在に至っています。「ボランティアと協会が協調・協働し事業の充実を図ること」「ボランティア相互の親睦を図ること」、これが委員会の主な運営目的です。

ボランティア委員会は毎月1回、日曜日に行われ、自

主事業の開催やボランティア活動時に発生した課題の報告とその対応について協議されています。

2007年(平成19年)には、このボランティア委員会による「ボランティアミーティング(通称ボラミー)」が神奈川訓練センターで開催されました。「ボラミー」は、企画から準備、運営のすべてをボランティア委員会のメンバーが中心となって進め、視覚障害への理解を深める貴重なイベントです。

夏には、富士ハーネスでボランティア夏祭りの開催、12月にはボランティア懇親会、3月にはボランティア研修会を開催しています。こうしたイベントでは、必ず犬のしつけの実技指導が行われています。

東日本震災から1年ほどたったころ、東北地方のボランティアから「ぜひ仙台でボラミーを」という声が上がりました。そして、2012年6月に仙台訓練センターでボランティアミーティングが行われたのです。東北地方では初のボラミー開催となり、40組のボランティア、職員含め総勢91人、23頭の犬たちが一堂に会し親睦を深めました。その後も「ボランティア懇親会」「ボランティアワークショップ」などを行い、親交を深めながら現在に至っています。

DATA file

2017年度 日本盲導犬協会に登録いただいているボランティア	
1. パピーウォーカー	127家族
2. 繁殖犬飼育ボランティア	49家族
3. 引退犬飼育ボランティア	171家族
4. 縫製ボランティア	33人
5. ケネルボランティア	219人
6. デモンストレーター	43人
7. イベントボランティア	320人



訓練士に見守られ、子犬の爪切りをするパピーウォーカー。子犬のあどけない表情に笑顔がこぼれます



盲導犬を引退した犬が穏やかに過ごすことができるのも引退犬飼育ボランティアのおかげです



地域ボランティア、ユーザーが一緒になって大規模な募金活動を展開



ボランティア懇親会で再会した犬たち。母犬を囲んで記念撮影



神奈川訓練センターで開催されたボランティア懇親会(2015年12月)

視覚障害者の社会参加を促し サポートする団体の全国組織

日本盲人社会福祉施設協議会

視覚障害者のために、社会福祉事業を通して社会参加を支援している施設や団体の全国組織です。

盲導犬育成事業者がすべて加盟し、盲導犬委員会を立ち上げ、

盲導犬の訓練基準や育成頭数等の統計の発表をしています。

当協会からは理事を送り出し、深い協力体制を築いています。

創立60年を超える 歴史ある福祉団体

日本盲人社会福祉施設協議会（日盲社協）は1953年（昭和28年）に発足しました。現在会員施設は200有余で、設立から半世紀を超えた歴史ある団体です。

日盲社協は、社会福祉に携わる関係機関と緊密な連携をとり、盲人福祉施設事業の育成・強化を目指しています。そして、福祉サービスを必要とする人々が、社会・経済・文化などの分野の活動に参加できるようにサポートを行い、視覚障害者の福祉増進に寄与することを目的としています。

日盲社協には分野別に5つの部会があり、それぞれが連携をとりながら活動しています。

点字出版部会

点字図書や雑誌の出版、自治体広報誌や点字印刷物の受託、点字教科書の出版などの活動を行っています。全国の点字出版施設が加盟しています。

情報サービス部会

全国の情報提供施設が、視覚障害者への情報提供事業のネットワークを作るための取り組みを行っています。全国の点字図書館が加盟しています。

自立支援施設部会

視覚障害者を対象とした就労支援事業、就労移行支援事業、自立支援事業、自立訓練・生活訓練事業、移動支援・同行援護・居宅介護などの生活支援事業や、盲導犬等訓練事業、あん摩・はり・きゅう師の養成事業などの推進を行っています。盲人ホームなどの施設が加盟しています。

生活施設部会

養護老人施設、特別養護老人施設、救護施設、訪問介護事業所、障害者ケアホーム、障害者支援施設、障害者

通所介護事業所、鍼灸^{しんきゅう}研修所などで、利用者の自立とQOLを重視した取り組みを行っています。視覚障害者に、生活する場を提供する施設が加盟しています。

盲人用具部会

点字案内板や点字ブロックなどの社会インフラ関連、点字プリンタやパソコン用ソフトなどICT関連、白杖や音声時計など日常生活用具販売など、また視覚障害者用用具の展示会を開催して、情報の発信や情報の共有化を図る活動を行っています。機器製造や販売する施設や企業が加盟しています。

「盲導犬訓練基準」の制定に 大きな役割を担う

5つの部会のうち、当協会が参加しているのは、「自立支援施設部会」で、その中の「盲導犬委員会」が主な活動の場です。この委員会には、盲導犬育成施設すべての11団体が参加しています。

当協会は盲導犬事業の早い時期から日盲社協に加盟しており、盲導犬事業の発展には大きな役割を果たしています。盲導犬の草分け的存在である故相馬安雄氏のご子息、雄二氏と松井新二郎氏（当時・国立東京光明園）が、「日本盲導犬協会」として、1961年（昭和36年）の第9回定期総会に出席している記述が残っています。

松井氏は、のちに盲導犬ユーザーとなり、日盲社協の理事長になります。理事長時代の1992年（平成4年）「盲導犬と社会～その受容と拒否の事例集」を発行しており、当協会との関係の深さは松井氏の功績によるところが大きいといえます。

日盲社協に対して、厚生省から盲導犬施設設置運営基準の策定依頼があり、盲導犬委員会が1992年（平成4年）に3基準を提出しています。その後、訓練基準は1998年（平成10年）に改正し5基準とし、さらに

日本盲人社会福祉施設協議会 第2号

昭和三十六年八月三十一日 第二号

日本盲人社会福祉施設協議会事務局
東京都台東区馬場一丁目六〇番地
国立東京南門

8	7	6	5	4	3	2	1
東京点字出版所	東京点字出版所	東京点字出版所	東京点字出版所	東京点字出版所	東京点字出版所	東京点字出版所	東京点字出版所
日本点字出版会	日本点字出版会	日本点字出版会	日本点字出版会	日本点字出版会	日本点字出版会	日本点字出版会	日本点字出版会
みちしるべ社	みちしるべ社	みちしるべ社	みちしるべ社	みちしるべ社	みちしるべ社	みちしるべ社	みちしるべ社
天理教本部三郷	天理教本部三郷	天理教本部三郷	天理教本部三郷	天理教本部三郷	天理教本部三郷	天理教本部三郷	天理教本部三郷
西大	天野	長	長	長	長	長	長
田	西	野	野	野	野	野	野
武	武	武	武	武	武	武	武
雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄

1961年の日本盲人社会福祉施設協議会の定期総会に、日本盲導犬協会として相馬、松井両氏が出席しています



日本盲人社会福祉施設協議会の理事として発表する
当協会吉川理事(鶴見大学、2017年6月9~11日)



自立施設部会の研修会、参加者による
盲導犬歩行体験(当協会神奈川訓練セン
ターにて、2016年11月19日、20日)

2009年に再改訂、2017年には3度目の改訂し、厚生労働省だけでなく、盲導犬認定基準として国家公安委員会に提出しました。

また、盲導犬委員会は、1992年から、育成施設から育成頭数、実働頭数、育成状況の報告を求め「盲導犬訓練施設年次報告」を定期的に発表しています。

盲導犬育成事業の基本となる「盲導犬訓練基準」、事業統計はこの「盲導犬訓練施設年次報告書」でまとめられており、盲導犬事業の全体レベルアップに大きく貢献しています(資料データ204~209ページ参照)。

当協会は、2011年から盲導犬委員会の中心メンバーとして評議員、2014年から理事を輩出し、盲導犬委員

会運営のみならず、自立支援施設部会の発展に寄与しています。

DATA file

名称：社会福祉法人 日本盲人社会福祉施設協議会

所在地：東京都台東区台東3-1-6

代表者：理事長 高橋秀治

設立年：1953年

会員数：約200施設

<http://www.ncawb.org> (2017年4月現在)

視覚障害者自らが、 自立と社会参加を推進するための連帯組織

日本盲人会連合

視覚障害者自身の手で、「自立と社会参加」を実現するための
全国組織が日本盲人会連合です。加盟する国内の視覚障害者当事者団体が、
視覚障害者福祉の向上を目指して、組織的な活動を展開しています。

視覚障害者の 「自立と社会参加」を推進

日本盲人会連合（日盲連）は、日本国内の視覚障害者を主体とする組織・団体で構成され、視覚障害者自身が「自立と社会参加」の実現を目指して活動する連合会です。視覚障害者政策に大きな影響力を持つ当事者団体です。日盲連は、1948年（昭和23年）、47都道府県と政令指定都市のうち、14都市の団体が参加して結成されました。参加団体数61、会員数は延べ50,000人に上ります（2016年4月現在）。

国や地方自治体が視覚障害者政策を立案・決定する際には、視覚障害者のニーズを政策に反映させるため、陳情や要求活動などを積極的に行っています。また、会員同士の親睦会や研修会、点字図書や録音図書の制作、点字器や白杖をはじめとした視覚障害者福祉用品の開発や販促活動なども日盲連の活動の一つです。

日盲連が誕生した1948年頃、日本はまだ戦争の傷跡を色濃く残していました。そして、翌年には念願の「身体障害者福祉法」が施行されました。こうした時代背景の中で、視覚障害者の明るい未来を作り出すために誕生した日盲連は、当時から現在まで障害者とともに前進してきました。

視覚障害者が住みやすい 社会の実現に向けた6事業

日盲連は、「視覚障害者にとって住みやすい社会を追求し、一人ひとりの視覚障害者が自らの人生を意識して自己実現を図ることのできる環境を整備することを目指す」を宣言し、次の6事業を中心に活動しています。

- 全国の視覚障害者団体に対する連絡および助成事業
- 点字図書館、点字出版所、更生相談所、録音製作所の設置・経営

- 点字情報ネットワーク、福祉用具の販売・^{あつせん}輸等の事業
- 福祉一般に関する調査研究、情報宣伝および文化活動
- あん摩・指圧・はり・きゅう等の生業の安定および職域拡大のための調査研究と医療保険取り扱い等の経営指導
- 国内外の関係団体との相互交流、協力事業

同じ理念を持つ 日盲連と当協会との深い絆

日盲連は、視覚障害者の「自立と社会参加」の実現を先頭に立って行っています。最近では、白杖歩行指導員の都道府県への配置基準について厚生労働省に要望したり、盲導犬ユーザーがホームから転落死した事件ではホームでの安全歩行に関する対策会議を開催したりと、移動支援が大きな課題として取り上げられています。東日本大震災を機に、当協会との協力体制が整い、安全歩行対策会議への参加、鉄道事業者向けシンポジウムの共催などを行っています。また、日盲連が開催するイベントでは、当協会が「盲導犬の歩行体験会」を行うなど、盲導犬の普及推進にも寄与いただいています。

視覚障害者の「自立と社会参加」の実現は、当協会の理念と同様であり、盲導犬ユーザーにとって、切っても切れない関係にあります。

DATA file

名称：社会福祉法人 日本盲人会連合
所在地：東京都新宿区西早稲田2-18-2
日本盲人福祉センター

代表者：会長 竹下義樹

設立年：1948年

会員数：61団体

<http://nichimou.org> (2016年4月現在)

視覚障害者の「社会参加と平等」のため 積極的な活動を行う団体

全日本視覚障害者協議会

視覚障害者の「社会参加と平等」を理念に、
視覚障害者のQOL向上や社会参加を推進する団体が全日本視覚障害者協議会です。
当協会とはイベントなどを通じて、いろいろな協力を続けています。

視覚障害者の 「社会参加と平等」を目指す

全日本視覚障害者協議会（全視協）は、視覚障害者の「社会参加と平等」を目指して、1967年（昭和42年）に設立された、会員数1,200人ほどの団体です。

同協議会の活動分野は、多方面にわたっています。

- ・視覚障害者に関する保健・医療・福祉に関する活動全般
- ・社会教育に関する活動全般
- ・街づくりに関する活動全般
- ・文化・芸術・スポーツに関する活動全般など

他にも、視覚障害者が参加できる講演会やイベントを開催するなど、幅広い分野での活動を行っています。

また、視覚障害者の人権や平和に関する活動全般、男女共同参画社会に関する活動全般、情報化社会に関する活動全般など、現在視覚障害者の社会参加を難しくしている社会問題にも取り組んでいます。

職業能力育成や雇用に関する課題解決にも尽力し、政府や行政機関に対する提案・陳情・要請などの活動も積極的に行っています。

最近では、地下鉄で起きた視覚障害者の転落事故を受け、可動式ホーム柵の早期設置を国土交通省へ要請するなどしています。

全視協のイベントには 当協会も積極的に参加

当協会とは、盲導犬の活用促進、視覚障害者の自立支援と社会参加支援などの活動で、協力関係を結んでいます。

また、全視協が行う交流会やさまざまなイベントに当協会は積極的に参加して、盲導犬の体験歩行会や、盲導犬にふれる場づくり、理解できる場づくりなどを提供させていただいています。

DATA file

名称：一般社団法人 全日本視覚障害者協議会

所在地：東京都豊島区駒込1-19-15 直枝ビル

代表者：代表理事 田中章治

設立年：1967年

会員数：約1,200人

<http://zenshikyou.net> (2017年8月現在)

盲人団体の連携で生まれた 世界とつながる国際交流の窓口

日本盲人福祉委員会

日本盲人福祉委員会は、視覚障害者福祉の推進のため、
視覚障害者団体や福祉施設、盲学校同士の情報交換や連絡調整などを行っています。
世界盲人連合に加盟し、国際交流の窓口としても活動しています。
東日本大震災支援対策本部が置かれ、当事者・支援者が協力して支援にあたりました。

世界基準のグローバルな視点から 生まれた団体

1951年(昭和26年)に、パリで世界盲人福祉協議会(World Council for Welfare of the Blind)が開催されました。この協議会開催を契機に、日本の呼びかけで、1955年にアジア盲人福祉会議が東京で開催されました。この会議で、世界盲人福祉協議会にアジア各国が加盟し、視覚障害者団体や福祉施設が連携し合うことが決議されました。

そして、翌年1956年(昭和31年)に誕生したのが、日本盲人福祉委員会(日盲委)です。日盲委は、日本盲人会連合、日本盲人社会福祉施設協議会、全国盲学校長会の3団体が協力と連携のもとに設立されました。

1969年に、視覚障害者自身の国際団体である「国際盲人連盟」(International Federation of the Blind)が、1984年には世界盲人福祉協議会と国際盲人連盟の理念を統合する「世界盲人連合」(World Blind Union)が設立されましたが、日本では、日盲委が世界盲人連合に加盟しました。これにより日盲委は、視覚障害者団体の国際交流の窓口となったのです。世界盲人連合では、日盲委が日本代表として、世界的な活動の一翼を担っています。

東日本大震災での 支援体制づくりで生まれた絆

2011年の震災で、東日本大震災視覚障害者支援対策本部が設置されたのが、視覚障害者の当事者団体、支援者団体、学校などが加盟している日本盲人福祉委員会でした。その現地拠点、当協会の仙台訓練センターに置かれました。そして日盲委と協力し合いながら現

地支援が行われていきました。日盲委による被災者支援活動は、大変注目された支援活動となり、厚生労働大臣から感謝状を受けることになりました。

これをきっかけにして、日盲委と当協会との絆は深まります。視覚障害者向け総合イベント「サイトワールド」を、2012年から日盲委が主催することになってから、当協会はブースを出し、盲導犬体験歩行会を実施しています。サイトワールドは、視覚障害者への日常サポート用品から最先端テクノロジーの紹介、また参加・体験できるシンポジウムや展示など多岐にわたり、3日間で延べ参加者は7,000人が集まる大きなイベントです。当事者の盲導犬体験歩行も100人に上ります。

震災対策が一段落した2013年には、日盲委に災害支援体制検討委員会が置かれ、当協会の吉川理事が委員として参加しました。また、震災4年後の2015年12月には、日盲委理事長で日盲連会長の竹下義樹氏が、当協会東京事務所へ来所され、井上幸彦理事長と会談しました。この会談で、日盲連、日盲委と当協会との協力体制をより一層強め、視覚障害の方の自立と社会参加を促進することを誓い合いました。

DATA file

名 称：社会福祉法人 日本盲人福祉委員会

所在地：東京都新宿区西早稲田 2-18-2

日本盲人福祉センター 2階

代表者：会長 竹下義樹

設立年：1956年

会員数：3団体

<http://www.ncwbj.or.jp> (2017年8月現在)



2012年11月1日から3日間開催された「第7回 サイトワールド2012」、日本盲導犬協会ブースには体験歩行を希望する人が並びました



東日本大震災視覚障害者支援対策本部「震災シンポジウム」開催。全国から300人余りが参加しました(2012年3月11日)

ともに生きる、ともに歩むを理念に
盲導犬の普及を支えています

全国盲導犬施設連合会

盲導犬育成への助成、盲導犬訓練士資格認定、
社会一般への啓発活動、行政機関への働きかけなど、
盲導犬業界の発展と盲導犬育成のための基盤整備、調査研究などを目的に、
盲導犬育成施設が集まって生まれたのが全国盲導犬施設連合会です。

前身は国鉄対応を行う 全国盲導犬協会連合会

現在、盲導犬は交通機関に自由に乗ることができ
ますが、かつては乗車することも難しい現実がありま
した。たとえば盲導犬を連れて電車に乗る場合、乗車の1
週間前までにそれぞれの盲導犬訓練施設が当時の国鉄
(現JR)に、その旨を届け出なければ乗ることができま
せんでした。

さらに、各盲導犬訓練施設が別々に申請すると業務
が煩雑になることから、国鉄は連絡・申請窓口の一本
化を求めてきました。この要請に応えるために結成さ
れたのが、全国の盲導犬訓練施設による全国盲導犬協
会連合会です。

1973年(昭和48年)に国鉄が規程を改正し、事前届
け出が不要となってからは、同連合会も実質的な役割
はなくなり、有名無実化していたのです。

盲導犬育成事業の発展のため 新たな連合会発足へ

日本の盲導犬育成施設は、それぞれ設立の時期や経
緯が異なるため、以前は独自に事業を行っていました。
しかし、盲導犬育成事業は、その大部分が寄付や募金に
よって運営されているため、盲導犬の啓発活動、訓練士
の養成、犬の繁殖などを着実に実行していくためには、
個々の施設の力だけではどうしても限界があります。

こうした現状を打開するためには、どうしても全国
の盲導犬協会が協力し合うことが必要で、より一層、盲
導犬の普及や視覚障害者の自立などに貢献することが
可能となります。そのためには新たな連合会を結成す
ることが必要であるとの共通認識が生まれたのです。

全国盲導犬施設 連合会の沿革

1994年(平成6年)6月、全国の盲導犬育成施設が
集まって連合会組織設立準備委員会が発足しました。
翌年3月には、当協会のほか北海道盲導犬協会、栃木県
盲導犬センター、アイメイト協会、中部盲導犬協会、関
西盲導犬協会、日本ライトハウス、福岡盲導犬協会の8
団体が結集し、全国盲導犬施設連合会設立総会が開か
れ、4月1日正式に発足となりました。

この新連合会の発足を機に、従来の全国盲導犬協
会連合会は解散となり、日本の盲導犬運動は新たなス
テージを迎えることになりました。

4月26日の「国際盲導犬の日」には、英国盲導犬協会、
衆参両院の議員や行政関係者など国内外からの来賓と
ともに、多数の企業関係者やボランティアが参集、東京
都新宿区の全国障害者総合福祉センター・戸山サンラ
イズにおいて発足記念式典が行われました。

その後、2008年(平成20年)6月に特定非営利活動
法人(NPO法人)として再スタート。さらに2011年
10月には国税庁長官より認定特定非営利活動法人(認
定NPO法人)として認定を受け、現在に至っています。

なお、この間、アイメイト協会が1995年12月に脱
会、加盟団体も名称・法人格も変更され、当協会を除く
現在の構成団体は以下のとおりです。なお近年、盲導犬
施設に指定された公益財団法人日本補助犬協会、一般
財団法人全国盲導犬協会は加盟していません。

- ・公益財団法人 北海道盲導犬協会
- ・公益財団法人 東日本盲導犬協会
- ・社会福祉法人 中部盲導犬協会
- ・公益財団法人 関西盲導犬協会



「全国盲導犬施設連合会」の発足式典。お祝いに駆けつけたユーザーたち(1995年4月26日)



パピー育成改善の取り組みとその可能性を発表する当協会の訓練士

- ・社会福祉法人 日本ライトハウス
- ・社会福祉法人 兵庫盲導犬協会
- ・公益財団法人 九州盲導犬協会

当協会と 施設連合会とのかわり

連合会発足当初からの同連合会の事務局は当協会の東京事務所内に置かれ、協会職員が事務を委託されていました。同連合会の全国盲導犬普及キャンペーンや寄付活動(募金箱)も、当協会の活動と密接な関係を持っていました。

その後「連合会のあり方」が検討され、2003年(平成15年)に事務局を独立させ、任意団体からNPO法人へと財政基盤を確立しながら現在に至っています。

事業遂行については、加盟団体の運営委員の協力で行っていますが、「全国盲導犬普及キャンペーン」などへの協力回数は、当協会が最も多く、また盲導犬訓練士資格制度を支える「学科講座21科目36単位」の通信教育用DVDの作成、「盲導犬育成ジャパンセミナー」の実質的な企画から運営のすべてを当協会が行い、施設連合会を底辺から支えています。また、2015年(平成27年)から当協会井上幸彦理事長が同連合会の理事

長に選任され、運営に携わっています。

施設連合会の 活動内容

まだ同連合会が正式にスタートする前、すなわち連合組織設立準備委員会が発足した1994年(平成6年)には、早くも「盲導犬同伴可」ステッカーの作成・配布を開始するなど、同連合会は加盟団体の緊密な連携のもと、盲導犬育成とその普及を図るために全国規模でさまざまな活動を展開してきました。

主な事業は以下のとおりです。

- 1 盲導犬普及啓発活動の実施
募金箱設置協力者の協力を得て店頭などで盲導犬デモンストレーションの実施
- 2 盲導犬普及のための広報誌等の発行
『デュエット』(年1回・4月発行)、『盲導犬情報』(年2回の発行)
- 3 盲導犬受け入れ促進のための活動
・補助犬同伴可ステッカーの作成・配布
・受け入れのためのパンフレットの発行
- 4 盲導犬歩行指導員等の研修と資格認定事業
・訓練士養成のための教育DVDの作成

- ・訓練士研修としてのジャパンセミナーの開催
 - ・IGDFセミナーへの訓練士派遣助成
 - ・訓練士資格認定テストの実施と資格証の発行
- 5 盲導犬に関する「相談室」の設置
- ・盲導犬使用者・盲導犬を希望する視覚障害者の相談
 - ・事業者の受け入れ相談・苦情の受付
 - ・市民の相談・苦情の受付
- 6 盲導犬事業推進のため資金助成
- ・加盟施設の盲導犬無償貸与事業への助成
 - ・繁殖研究への助成

「盲導犬育成ジャパンセミナー」 の開催

同連合会主催で、当協会の主管による「第1回 盲導犬育成ジャパンセミナー」が2016年(平成28年)2月に開催されました。

このセミナーの開催は、当協会を含む全国8つの加盟団体が一丸となって取り組み、盲導犬育成訓練技術の向上や優秀な人材の育成を目指したもので、日本の盲導犬育成事業における画期的な取り組みとなりました。

第1回盲導犬育成ジャパンセミナー

第1回盲導犬育成ジャパンセミナーは2月3日、4日の2日間にわたって当協会の神奈川県訓練センターにて行われ、盲導犬訓練士等の関係者らが多数集結しました。

期間中は教育講演6題、研究発表8題をはじめ、共同訓練の事例発表など、熱気にあふれた2日間となりました。

教育講演では、盲導犬草創期から視覚障害者への白杖歩行指導を行ってきた清水美知子氏による講演や、東京大学医学部眼科准教授の加藤聡氏による講演のほか、当協会理事の多和田による講演も行われました。また、厚生労働省障害福祉部自立支援振興室長の特別講演では、同年の4月から施行される障害者差別解消法に関しての要点や課題が説明されました。現場の訓練士らによる育成現場からの研究発表では、当協会からも2題を発表しました。

また、セミナー開催日に前後して盲導犬訓練士・歩行指導員の実技試験や盲導犬訓練伝承会も行われました。

第2回盲導犬育成ジャパンセミナー

2017年2月8日、9日の2日間にわたり、第1回と同様に当協会の神奈川県訓練センターでの開催となりました。

前年から相次いだ盲導犬ユーザーの駅転落事故を重く受け止め、第2回のセミナーは「より安全・安心な盲導犬歩行のために」をテーマに掲げての開催となりました。

期間中は全盲の弁護士や医療研究者による講演が4題、加盟団体の現場からの11題の研究・報告等が行われたほか、新たな試みとしてセミナーの一部を盲導犬ユーザーにも公開し、約20名のユーザーが聴講しました。

第1回セミナーと同様に、盲導犬訓練士・歩行指導員の実技試験と盲導犬訓練伝承会が行われました。

盲導犬歩行指導員等 資格認定制度の意義

同連合会の重要な事業の1つに、盲導犬訓練士と盲導犬歩行指導員の資格認定事業があります。

この事業は、盲導犬育成事業に携わる訓練士・歩行指導員の資格を確立し、盲導犬を希望する視覚障害者やユーザーが、全国どここの施設においても同じサービスを受けることができるようにレベルの向上を図り、その社会的地位を高めることを目的に行っています。

認定は、連合会に加盟している訓練施設職員で認定審査を申し込んだ者を対象に、盲導犬歩行指導員等資格認定委員会が審査します。(詳細は第1章第3節64ページ、第3章第6節158ページ参照)

DATA file

名 称：認定NPO法人 全国盲導犬施設連合会
所在地：東京都新宿区住吉町5-1 吉村ビル2階
代表者：理事長 井上幸彦
設立年：1995年
<http://www.gd-rengokai.jp> (2017年8月現在)

第1回ジャパンセミナー



「盲導犬訓練技術伝承会」で指導する多和田理事



視覚障害歩行指導の専門家による講義

第2回ジャパンセミナー



熱心に耳を傾ける参加者たち。犬も静かに聴いています



協会職員も共同訓練の事例を発表

世界各国の盲導犬育成事業の発展をサポートすることが使命

国際盲導犬連盟 (International Guide Dog Federation)

国際盲導犬連盟 (IGDF) は、2017年現在、世界の約30か国、92の盲導犬育成団体が加盟する国際的な組織です。盲導犬の質を確保するための最低基準を定めており、加盟施設の指導、相互交流など施設支援を目的としています。当協会はアジア・日本では唯一、IGDFに理事と査察員を出して連盟運営に貢献しています。

盲導犬育成事業の国際的な組織

国際盲導犬連盟 (以下、IGDF) は、盲導犬は目の見えない人・見えにくい人の独立した歩行手段としての盲導犬の提供を推進するために設立され、世界各国の加盟団体の取り組みを支援することを使命・目的としています。

具体的には、各団体に対して繁殖や盲導犬訓練に関し、IGDFスタンダードに基づき加盟団体を査察したり、新たに加盟を希望する団体を加盟できる水準に引き上げたりします。また、2年に1回セミナーを開催して、加盟団体相互の情報交換や人材交流、情報提供を行い、盲導犬育成を支援しています。現在、本部はイギリスのロンドンにあります。

「国際盲導犬の日」は、毎年4月の第4水曜日に制定されていますが、これはIGDFの前身である国際盲導犬学校連盟の発足が1989年 (平成元年) 4月12日水曜日であることに由来しています。

IGDFに加入するためには、盲導犬育成に関するスタンダードを満たして、通算10頭以上の盲導犬を育成していることが条件です。加盟にあたっては、IGDFの指導を受けることもできます。加盟後は、5年に1度の3～5日間の査察を受けることが求められます。日本のように盲導犬に関する法律がない諸外国においては、IGDFに加盟していることが盲導犬事業の健全さの証明になるのです。そのため、IGDFへの加盟が補助金受給の条件になっている国がアメリカをはじめ多くあります。

現在では、17団体が加盟申請中であり、10団体が検討中と、加盟団体は年々増加しています。

当協会との強いかわり

IGDFの設立は1989年 (平成元年) ですが、その5年後の1994年 (平成6年) には、当協会理事で訓練育成統括責任者の多和田 (当時は関西盲導犬協会に所属) がIGDFのアセッサー (査察員) に就任しました。

アセッサーは、各加盟団体がIGDFの定める基準をきちんと満たしているかを査察するのが業務です。多和田は現在に至るまでの20年間にわたり、その責務を果たしています。多和田がアセッサーに就任した4年後、当協会は1998年 (平成10年) にIGDFに加盟しました。

理事選任の仕組み

IGDF理事の任期は1期4年と定められています。当協会からは、2004年から2012年の2期にわたり故中野隆敏 (当時・常任理事) が、2012年から2016年は勅使川原直彦 (現・常任理事) が、さらに2016年からは小田和正 (現・常任理事) が、それぞれIGDF理事に就任しています。

理事は7人おり、2年に1回開催されるIGDFセミナーで、その約半数にあたる3人あるいは4人が改選されます。改選時には、立候補者は英語で演説を行い、加盟施設が選ばれます。上位者でかつ全加盟施設の半数以上から選ばれることが条件です。日本から選ばれている理事とアセッサーはそれぞれ1人のみです。

わが国初のセミナーは当協会がホスト団体に

IGDFは盲導犬の訓練技術や繁殖、運営のための資

金調達など、盲導犬育成にかかわるあらゆる分野の発表と交流の場として、2年ごとにセミナーを開催しています。

1990年から2018年までの開催地と主催団体の一覧を掲載しました。

最近3回のセミナーの内容を紹介します。とくに2014年に開催された日本初のセミナーでは、当協会がホスト団体として中心となって運営し、日本の盲導犬育成事業の発展に大きく貢献する一大イベントとなりました。

IGDF セミナー開催地

開催年	開催国・都市	主催団体
1990	イギリス ロイヤルレムントン スパ	Guide Dogs for the Blind Association
1992	イギリス レディング	Guide Dogs for the Blind Association
1994	イギリス レディング	Guide Dogs for the Blind Association
1996	フランス クレモンテ フェランド	Federation Francaise Associations De Chiens Guides d'Aveugles
1998	アメリカ カリフォルニア	Guide Dogs for the Blind Inc
2000	イギリス ワーウィック	Guide Dogs for the Blind Association
2002	大韓民国 ソウル	Samsung Guide Dog School
2004	スイス レンク	Verein für Inenhunde und Mobilitätshilfen
2006	アメリカ ニューヨーク	Guide Dog Foundation/ Guiding Eyes for the Blind/ The Seeing Eye Inc
2008	イギリス ロンドン	Guide Dogs for the Blind Association
2010	カナダ オタワ	Canadian Guide Dogs for the Blind
2012	フランス パリ	Federation Francaise Associations De Chiens Guides d'Aveugles
2014	日本 東京	Japan Guide dog Association
2016	クロアチア フヴァル	Croatsian Guide dog and Mobility Association
2018	オーストラリア シドニー (予定)	Guide Dogs NSW/ACT

当協会の職員が 各セミナーで発表

2012年開催のフランス・パリセミナー

2012年(平成24年)5月10日から13日までの4日間、フランスのパリで開催されました。日本を含む世界28か国から約300人が参加し、参加者はさまざまな発表に熱心に耳を傾けました。

なかでも、開催の1年前に日本で起きた東日本大震災について、大きな関心を集めることとなりました。被災した視覚障害者への支援活動について、仙台訓練セ

ンターの金井政紀(現・センター長)が発表する機会を得ることができました。さらに発表後の質疑応答でも、被災地での生活の様子やユーザーにとって何が大変であったかなど、具体的な質問が相次ぎ、大震災への関心の高さがうかがえました。

パリではスーパーマーケットやレストラン、ホテルでも当たり前のように家庭犬を連れてくる姿が見られ、盲導犬はもちろんのこと、訓練犬でも大抵の場所が利用できるなど、日本からの参加者には盲導犬に対する文化の違いを知る良い機会となりました。

2014年開催の東京セミナー

IGDFの13回目のセミナーが2014年(平成26年)5月10日から3日間にわたり、東京都新宿区の京王プラザホテルで開催され、世界23か国68団体から300人近くの盲導犬育成事業者が参加しました。

日本初のセミナーでは、当協会がホスト団体となり、多くの企業やボランティアの支援を得ながら運営を行いました。

このセミナーで発表された課題は全21題に及び、当協会からはそのうち6題が選出されました。なかでも日本国内では盲導犬が活動する上で必須の排泄管理とその他のための訓練、雪道歩行の安全性を研究する中で開発されたハーネス、またバーハンドル型ハーネスなどに関する発表では、日本発のアイデアに高い関心が寄せられました。

海外の発表テーマも多岐にわたりました。

「パピーの継続的訓練と豊富な社会化プログラム」と題したアメリカの育成団体からの発表では、犬の脳の発達に合わせて、パピーが盲導犬として人間社会で暮らしていくために必要な「社会化プログラム」を行うことがいかに大切であるか、データを示しながら検証結果が示され、同じ課題意識を持つ当協会の訓練士も大いに刺激を受けました。

ほかにも、犬の管理方法や盲導犬に関する知識などの情報をインターネットを通じて提供する「e-ラーニング」の実例を紹介したオランダの発表など、パピー育成の技術はもちろん、ITを活用した情報技術や事業運営に至るまで、幅広いテーマが取り上げられました。

当協会の発表者と発表テーマは、次のとおりです。

- 1 川本 勝「パピープロジェクトから見てきた『盲導犬としての社会化』の考察」
- 2 吉澤 聡・鈴木知之・多和田悟「重複障害者への盲導犬歩行への取り組み」



2007年5月、IGDFの理事たちが富士ハーネスを訪問



東日本大震災で被災した視覚障害者への支援について英語で発表
(2012年フランス・パリIGDFセミナー)



2014年、IGDF 東京セミナーでは訓練センター
見学の機会もありました



発表者に惜しめない拍手を送るセミナー出席者の
皆さん。セミナーは盛況のうちに幕を閉じました



国内初の開催となった2014年 IGDF 東京セミ
ナーで、当時の理事が集まって記念撮影



ウェアラブルカメラを装着し
遠隔からでも訓練が可能になる
取り組みを発表する多和田
理事。多くの質問が寄せられ
ました (2016年クロアチア
IGDFセミナー)

- 3 田中真司・青木舞子「雪道歩行の課題と対策、そしてハーネスの開発」
- 4 末永陽介「排泄管理しやすい盲導犬の育成」
- 5 多和田悟・山田 大「バートタイプのハーネスハンドルの開発」
- 6 高野秀一「10億円への道」

セミナー期間前後には、当協会の各訓練センターへの見学ツアーも企画されました。神奈川には87人、仙台には23人、富士宮には44人が参加し、センター職員も総出で参加者のおもてなしに努めました。わが国初の開催となったIGDFセミナーは、こうして大好評のうちに閉幕となりました。

なお、翌5月13日、14日と、場所を変え富士ハーネスでAGBN主催の繁殖ワークショップを開催しました。参加者は、国内外の繁殖担当者94人で、「パピーの行動評価とその実際」について実技をまじえ発表・討論されました。

2016年開催のクロアチア・フヴァルセミナー

2016年のセミナーはクロアチア共和国のフヴァルで、5月20日から3日間にわたって開催されました。開催中は2回の基調講演とパネルディスカッション、25のワークショップ、17のポスターセッションなど、大変豊富なカリキュラムが組まれました。

当協会からは多和田（現・理事）が「盲導犬歩行指導のためのウェアラブル端末」を発表。ウェアラブルカメラを装着して遠隔からの訓練が可能とする画期的な取り組みについて内容でした。

ポスターセッションにおいても「夜間歩行の安全性を高めるレーザーライトを活用した視認性向上のための取り組み」「ACジャパンコマーシャルの取り組み」など、5つのテーマを発表しました。これにより、当協会の盲導犬育成事業への取り組みに対する積極的な姿勢を多角的にアピールすることができました。発表に対して参加者からさまざまな質問が寄せられるなど、関心の高さをうかがわせたと自負しています。

なお、IGDF理事7人のうち3人が退任、1人が空席となるため、次期理事の改選も行われ、当協会の小田和正（現・常任理事）が立候補し、プレゼンテーションを経ての選挙で当選し、引き続き当協会の理事がIGDF運営の一翼を担うこととなりました。

アセッサーの仕事とは？

IGDFに加盟している訓練施設は5年に1回、訓練基準に合致しているかどうか、アセッサーと呼ばれる査察員による査察を受けます。IGDF査察員である当協会・多和田の報告を通して、査察業務の一端をご紹介します。

多和田が査察員として2009年9月に訪れたのは、フランスのリモージュとエスクという町の比較的小規模の盲導犬訓練センターでした。

リモージュの訓練センターの職員は6人。年間10から13ユニットの訓練をしていました。3人の訓練士（歩行指導員）はパピーも担当。5か月までにしなければならぬことを徹底してPW（パピーウォーカー）に求めます。5か月以上になると月に1回、1週間にわたりセンターで預かり、訓練に近いものを行います。

また、プロヴァンス地方のエスクという町の協会は、当時、創立者夫妻が指導員と事務責任者を務める家庭的な協会でした。自家繁殖もして、フラットコート・レトリバーや白いシェパードもいました。マルセイユ在住の盲導犬ユーザーの歩行も視察したところ、ユーザー自身が盲導犬を使う責任を果たそうとする姿が印象的だったとのことでした。

DATA file

名 称：International Guide Dog Federation
（国際盲導犬連盟）
所在地：イギリス・ロンドン
加盟国 イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、オランダ、カナダ、オーストラリア、日本、韓国など30か国
設立年：1989年
<http://www.igdf.org.uk>

（2017年8月現在）

東アジア圏から欧米へと広がる 盲導犬の繁殖ネットワーク

アジア・ガイドドッグス・ブリーディング・ネットワーク (AGBN)

アジア・ガイドドッグス・ブリーディング・ネットワーク (AGBN) は、アジア各国の盲導犬育成団体と連携して、盲導犬育成に欠かせない繁殖分野での情報共有と協力体制の構築を推進しています。その活動は徐々に広がりを見せ、欧米とのネットワークも整備され、盲導犬改良システムの構築に向け取り組んでいます。

盲導犬育成事業の成否を左右する 繁殖体制の充実度

盲導犬の資質は遺伝的な要因によるところが大きく、盲導犬に適した候補犬を確保するための繁殖体制の充実度は、当協会だけでなく盲導犬育成施設にとって大きな課題です。

また、適切な繁殖活動をしていくためには、一定頭数以上の繁殖犬コロニーが必要であり、これは1施設では対応できない課題です。この課題に対して日本、韓国、台湾の盲導犬育成団体は、盲導犬の繁殖に関する相互協力体制を目的とするアジア・ガイドドッグス・ブリーディング・ネットワーク (以下、AGBN) を2002年 (平成14年) 4月17日に結成しました。

アジアから欧米へと 広がるネットワークの構築

現在 AGBN に参加しているのは、日本では全国盲導犬施設連合会加盟の日本盲導犬協会を含む8施設、韓国が1施設、台湾が2施設で合計11団体です。

AGBN は、加盟している11団体が正会員となり、それぞれの団体から運営委員と実務担当者を各1名選出し、運営委員会と実務担当者会議で運営されています。運営委員会では、事業計画と年度予算の立案、決算報告などを行い、実務担当者会議では、各施設の繁殖犬の評価、交配計画、子犬分配、新血統の導入など、事業計画に基づく実務を行います。

AGBN の運営目的は、各施設の繁殖情報の収集と共有、繁殖コーディネート、データベースの構築と運用、会員外施設との繁殖協力などがあります。

重点事業としては「データベースを活用した繁殖犬

の情報管理事業」「遺伝疾病対策事業」「交配及び凍結精液事業」「ヨーロッパ及びアメリカとの繁殖協力事業」の4つがあげられています。

なかでも、盲導犬に関して長い歴史を持つヨーロッパやアメリカとの協力は不可欠で、「ヨーロッパ及びアメリカとの繁殖協力事業」は注目の事業です。

盲導犬の繁殖に関しては、日本やアジアに比べ、先を進んでいる欧米と繁殖の協力体制を築くことは重要なアプローチになります。AGBN を一つの繁殖コロニーとして、欧米の繁殖コロニーから認められることへの挑戦が始まりました。

AGBN加盟団体リスト

国	加盟団体名
日本	公益財団法人 北海道盲導犬協会
	公益財団法人 東日本盲導犬協会
	公益財団法人 日本盲導犬協会
	社会福祉法人 中部盲導犬協会
	公益財団法人 関西盲導犬協会
	社会福祉法人 日本ライトハウス
	社会福祉法人 兵庫盲導犬協会
	公益財団法人 九州盲導犬協会
韓国	サムスン盲導犬協会
台湾	重建院
	台湾盲導犬協会

AGBNの活動がもたらした 世界規模の協力体制の推進

AGBN の挑戦による成果の一つに、繁殖犬の基準を作成したことがあります。以前は各国、各施設の独自の判断で繁殖犬を選別していたため、各施設の繁殖犬の



台湾で開催された会議に参加したメンバー(2008年)



2014年AGBNが主体となり運営された繁殖ワークショップが富士ハーネスで開催

健康状態や気質、遺伝傾向にはばらつきがありました。そこでAGBNは、繁殖犬の適正な資質に対する共通認識を持つため、身体面と気質面に分けて統一基準を設け、データベース化したのです。

このデータベースには、個々の犬の基本的情報、その犬の遺伝的疾患の情報、子犬情報、血統図、固体写真などが登録され、インターネットを利用して、国内のみならず韓国や台湾の施設からも閲覧できるようにしています。さらに交配した牡犬、形態、時間、結果などの交配情報、子犬の頭数、子犬の現況(パピーウォーキング中、訓練中など)ほか、いろいろな子犬情報なども登録・閲覧できます。

こうした活動によって、AGBNが一つの繁殖コローニーとして世界的に認められたため、AGBNとしてアメリカやイギリスから繁殖犬や凍結精液の輸入ができるようになりました。

また、国内では、繁殖犬の貸し借りや、AGBN所有の繁殖犬から生まれた子犬の分配など繁殖交流が行われるようになりました。当協会も一時期繁殖犬の確保に苦労した時期があり、繁殖候補犬やパピー犬を譲り受けたこともあります。

2014年のIGDFセミナー東京大会直後に富士ハー

ネスで開催されたブリーディング・ワークショップで、新評価システムがアメリカから提案され、AGBNはその導入を決めました。そのBCL (Behavior Check List) によるデータから育種価を算出することによる盲導犬改良システムの構築が始まっています。各施設が協力して800頭のデータを集め、2017年度にシステム構築を目指しています。

AGBNの事業は、次の時代への入り口にきています。

🐾 DATA file

名称: アジア・ガイドドッグス・ブリーディング・ネットワーク (AGBN: Asia Guide Dogs Breeding Network)

所在地: 京都府亀岡市曾我部町犬飼末ヶ谷18-2
関西盲導犬協会内

代表者: 運営委員会幹事 古橋博昭

設立年: 2002年

会員数: 11団体

(2017年8月現在)

障害者の社会参加を推進し、 補助犬育成の支援も進めるセンター

盲導犬総合支援センター

盲導犬総合支援センターは、盲導犬ユーザーの犬飼育のためのフードや犬具の安価での販売、チャリティーグッズの販売などを行っています。

盲導犬ユーザーの犬飼育支援とともに、社会理解の普及を進め、同時にチャリティーグッズ購入者の思いを盲導犬ユーザーに届けています。

グッズ販売、イベント支援などで 障害者と盲導犬を支援

盲導犬ユーザーが使うドッグフード、大型犬用のコート、ハーネス、グルーミング用ブラシなどの犬具を安価で届ける直接的な支援、独自の盲導犬啓発イベントや当協会やボランティア委員会が行うイベントの支援、チャリティーグッズの販売収益からの寄付などで、盲導犬事業への支援を行っているのが盲導犬総合支援センターです。介助犬などの補助犬や東日本大震災を機に被災犬への支援へも活動を広げています。

盲導犬総合支援センターの前身は、2004年(平成16年)4月に任意団体としてスタートした「盲導犬支援センター」です。

当時、当協会職員がユーザーへのサービスとしてボランティアで行っていたドッグフードの自宅への送付、盲導犬取得時に必要なケージや食器、犬のおもちゃなどの飼育用犬具の準備や、チャリティーグッズ販売などを事業として独立させたのが盲導犬支援センターでした。

スタートと同時にサービスを充実させ、2004年当時、当協会の神奈川訓練センターと仙台訓練センター内にチャリティーグッズ販売ショップをオープン。翌年には、インターネットでチャリティーグッズを販売する通販サイトを開設しました。さらに、盲導犬ユーザーとボランティア向けに関連グッズの通販サイトも開設しています。

その後、複数のショップをオープンするなど、順調な活動を展開していきました。さらに支援の輪を広げ、多くの人々の思いに応えるため、2009年(平成21年)11月には法人化をして、「一般社団法人盲導犬総合支援センター」として再スタートしました。

グッズ販売からライセンス事業へ。 さらに広がる活動範囲

同支援センターの主な活動内容は次の通りです。

盲導犬育成団体・盲導犬ユーザー、ボランティアの支援事業

犬具・ドッグフードの紹介と販売、盲導犬との生活に伴うグッズの開発・販売、ハーネス胴輪・ハンドルの制作と管理、募金箱発送業務代行、募金活動、盲導犬育成団体・補助犬ユーザー・ボランティア主催イベントのサポート、視覚障害者へのリハビリテーショングッズ販売などを通じて、盲導犬育成団体への業務サポート、盲導犬ユーザーと盲導犬の日常生活に対する支援を行っています。

盲導犬普及活動の支援

当協会と連携して盲導犬育成を広く紹介するイベントや講演会などの活動を行っています。主にライセンス事業により、盲導犬育成事業をともに応援する企業のCSR向上にも貢献しています。

チャリティーグッズ販売

「使っていただくことで自然に広がる盲導犬応援の輪」をコンセプトに、直営店やネットショップでチャリティーグッズを販売しています。大人から子供まで、チャリティーグッズを通して盲導犬の知名度、認知度を上げ、障害者や補助犬への理解を深めることを目指しています。

CSR推進活動

企業や団体に、同支援センターのライセンスを使ったオリジナルグッズの作成やCSR活動のため同支援センターのグッズの採用、またチャリティーグッズの社内販売会などを推進していただくことを提案しています。これにより、企業や団体のCSR活動の活性化にもつな



富士ハーネスの盲導犬サポートSHOP。来館の記念にと好評です



イベントでも盲導犬チャリティーグッズを販売して盲導犬の育成をサポート



障害の有無に関わらず、同じフィールドでスポーツを楽しむ交流できるチャリティー・スマイル・ラン(2015年)

がとれます。

チャリティーイベントの開催

誰もが気軽に参加でき、楽しみながら社会貢献ができるイベントの開催を行っています。こうしたイベントで、一般の人と障害を持つ人が垣根なく共生できる社会づくりへのメッセージを発信します。年1度のメインイベントである「チャリティー・スマイル・ラン」には、障害の有無にかかわらず多くの方が参加し、コミュニケーションの輪を広げています。また、イベントには補助犬も参加し、補助犬の啓発活動にも寄与しています。

当協会のセンター内にショップを展開。 常に共生関係を維持

2004年(平成16年)に独立して以来、同支援センターと当協会は独立と相互協力のかかわりを持っています。

ショップでは、ファッション小物、生活雑貨、文具など、さまざまなチャリティーグッズを販売しています。2006年10月には当協会が開所した「盲導犬の里 富士ハーネス」内に、2008年には「島根あさひ訓練センター」内に、それぞれ販売ショップをオープンしました。現在、支援センターの直営ショップ4店は、すべて当協会の施設内で活動しています。

当協会は、2016年、同支援センターのご協力を得て、「盲導犬フード支援制度」「盲導犬スタート支援制度」をスタートさせました。これは当協会の活動方針の1つ

「盲導犬の一生に責任を持ちます」を実現化させたものです。

フード支援制度は、盲導犬ユーザーだけでなく犬飼育ボランティアなど、当協会の所有犬や元所有犬の飼育者に、フードの運送費・手数料等を協会が負担することで、良質なフードを低廉な価格で自宅に届けられることができる制度です。特別療法食を食べている犬には、差額補助をして、ユーザー間で経済的負担差がないようにしています。この制度は他協会でも検討されています。

飼育スタート支援制度は、大型犬の飼育を始める際、安心して使っていただける各種犬具を低廉な価格でお届けする制度です。盲導犬ユーザーの負担軽減になっています。

こうした取り組みは、同支援センターの理解と協力なくしてはできないものです。

DATA file

名称：一般社団法人 盲導犬総合支援センター
所在地：横浜市都筑区茅ヶ崎南5-2-22
代表者：代表理事 高橋忠生
設立年：2004年4月設立、2009年11月法人化
直営店：4店舗「サポートSHOP」、ネットショップ「盲導犬サポートSHOP」
<https://goguidedogs.jp>

(2017年8月現在)

世界初の補助犬に関する学術団体として 身体障害者の自立と社会参加を推進

日本身体障害者補助犬学会

日本身体障害者補助犬学会は、
世界で唯一の補助犬訓練に携わる訓練従事者と当事者である補助犬使用者に加え、
医療従事者、福祉関係者、獣医療従事者、行政関係者、教育関係者など
補助犬を取り巻く専門職が横断的にかわる学術団体です。

補助犬に関する幅広い分野からの 学術的な取り組み

2002年(平成14年)に身体障害者補助犬法が成立、
施行され、徐々にですが補助犬の普及に対する取り組みが行政も交えて始まりました。しかしながら、補助犬の効率的な育成方法や社会的認知度アップなど、課題は山積していました。そこで高柳友子氏(日本介助犬協会専務理事)の声かけにより、2005年に補助犬の普及と発展を願う学識経験者が集まって日本身体障害者補助犬学会が設立されました。当協会からは中村透(当時、訓練部長)が理事に選任され、また学会事務局を日本盲導犬協会内におくことになりました。こうして世界初の補助犬に関する学術団体が誕生しました。

学術大会と シンポジウムを開催

記念すべき第1回学術大会は、国立身体障害者リハビリテーションセンターで開催され、当協会職員や補助犬使用者などの関係者が集まり補助犬に関する学術的な取り組みの幕が開きました。

また、2008年(平成20年)に行われた同補助犬学会主催のシンポジウムでは、中村透が大会会長となり、「補助犬の福祉を考える～動物福祉の現状と課題～」をテーマに100人を超える参加者が集まり、当協会の富士ハーネスで開催されました。

これを含め、同補助犬学会はこれまでに9回の学術大会と3回のシンポジウムを開催しています。

学生による 研究発表の場としても活用

当協会の盲導犬訓練士学校の学生が1年かけて行った自由研究は、通常協会内のみで発表の場を設けていました。それを同補助犬学会の学術大会でも口頭発表やポスター発表を行うことができるようになり、大会参加者にとって盲導犬訓練士学校での成果を報告する場ともなりました。

2020年東京オリンピック・ パラリンピックに向けて

日本の玄関である「空港」という場所で、補助犬使用者だけでなく、すべての障害者が快適に国内移動を行えるように、受け入れ側の企業関係者を対象にした補助犬セミナーを同補助犬学会主催で開催しています。

当協会からは、松浪芳郎訓練管理長が2015年から理事として参画し、盲導犬育成団体の立場からセミナーに協力をしています。

DATA file

名称：日本身体障害者補助犬学会
所在地：東京都渋谷区神泉町21-3-3階
日本盲導犬協会 東京事務所内
代表者：理事長 秋田裕
設立年：2005年
<http://www.jssdr.net>

(2017年8月現在)

リハビリテーションに関心を持つ人たちが 視覚障害者の福祉向上を目的として結成した団体

視覚障害リハビリテーション協会

福祉・教育・職業・医療等の分野における、
視覚障害者(児)に対するリハビリテーションに関心を持つ人たちの
相互の学際的交流、指導技術向上を図っています。
設立以来、視覚障害リハビリテーションの発展・普及に寄与してきました。

視覚障害リハビリテーションに携わる人の 研究発表と交流の場

1972年(昭和47年)、日本ライトハウスの歩行訓練指導員講習会修了者によって結成された「歩練士研究会」が日本歩行訓練士協会へと発展。一方、「視覚障害日常生活訓練研究会」や「ロービジョン研究会」など、視覚障害者のリハビリテーションに関する団体が相次いで結成され、活動を始めました。

1990年にはこれらの団体の代表者が集まり、視覚障害者へのサービスを包括的、かつ組織的に行うことが必要だとの認識のもと、「視覚障害研究会等連絡会」を発足させました。そして、団体の統合に向けての検討が行われ、1992年(平成4年)2月に設立されたのが「視覚障害リハビリテーション協会」です。

同リハビリテーション協会の主な活動は、年1回の研究発表大会の開催、研究会・講演会・講習会などの開催、論文誌『視覚リハビリテーション研究(Japanese Journal of Vision Rehabilitation)』の年2回発行などです。

特に、研究発表大会は、口頭研究発表、ポスター発表、シンポジウム、ワークショップ、最新の視覚障害者向け機器の展示など、会員相互の研究成果の発表と交流の場となっています。毎回、大会には会員をはじめ、開催県の視覚障害者など500人を超える参加者が集まります。

同リハビリテーション協会の目的に賛同する人であれば、誰でも会員になれます。社会福祉施設職員、盲学校・弱視学級教諭、大学および研究機関の研究者、眼科医、視能訓練士、ボランティア活動家、視覚障害者やその家族などと、現在、会員総数は500人を超えています。

盲導犬は視覚障害リハの一つ 積極的な相互協力でリハ協を支える

当協会には、日本ライトハウスの歩行訓練指導員講習会を修了した訓練士が多数在籍しています。常任理事の多和田もその一人で、第1回大会では白杖と盲導犬の併用、第2回ではロービジョン、第3回はタンデム歩行について発表をしています。

また毎年のように、当協会から口頭発表やポスター発表をしています。2004年から2009年までは当協会の訓練部長中村透が同協会の会長を務め、2015年から同リハビリテーション協会の事務局を引き受け、大会の開催支援や事業運営を底辺から支えています。

当協会は盲導犬事業は、広義の視覚障害リハビリテーションの一つと考えています。視覚障害者の移動支援としては、盲導犬による歩行訓練と白杖歩行訓練とは、技術的にも緊密な関係があります。

視覚障害者の自立と社会参加への支援は、さまざまな視覚障害リハビリテーション関係者との協力体制なくしては目的を達成することはできません。互いに切磋琢磨しながら、リハビリテーションの振興と、それに伴う障害者福祉の進展を目指して、より良い協調関係を築いています。

DATA file

名 称：視覚障害リハビリテーション協会

所在地：東京都渋谷区神泉町21-3-3階

日本盲導犬協会 東京事務所内

代表者：会長 吉野由美子

設立年：1992年

会員数：525人

<http://www.jarvi.org>

(2017年8月現在)

大学の研究室と 新たな課題を共同で調査・研究

獣医系大学との連携

日本盲導犬協会は、獣医系学部を持つ大学や研究室などと共同研究、人材交流、施設・設備の相互利用における連携協力協定を結んでいます。

これにより、大学の研究室や専門家と共同しての科学的な調査・研究や高度医療の提供などを行い、盲導犬を取り巻く課題解決につなげています。

「盲導犬の育成を科学します」。これは当協会の7つの活動方針の1つです。盲導犬の育成工程、とりわけ健康管理や行動学の分野においては、獣医系学部を持つ大学や研究室などとの連携は欠かせません。学生の研修受け入れ、共同研究におけるデータの提供、難治性の疾病の治療などで相互協力を行っています。

こうした連携によって、当協会に在籍するすべての犬への医療体制が構築できました。「盲導犬の一生に責任を持ちます」、この活動方針を実践が可能となったのです。

さらに、より高品質の盲導犬育成には、遺伝子レベルの研究を含め、より高度な研究対応が欠かせません。各大学・研究機関との連携協力の現状は次のとおりです。

- 2008年(平成20年)7月
日本獣医生命科学大学と連携協力に関する包括契約締結
- 2008年(平成20年)8月
麻布大学と連携協力に関する包括契約締結
- 2015年(平成27年)11月
東京大学大学院農学生命科学研究科と連携協力に関する包括契約締結
- 2015年(平成27年)9月
北里研究所・北里メディカルセンターと医療現場における動物介在活動(AAA=Animal Assisted Therapy)・動物介在療法(AAT=Animal Assisted Therapy)に関する連携・協力協定締結

研究内容例

麻布大学 獣医学研究科伴侶動物学研究室 「犬におけるストレス内分泌の発達特性と行動の関連」

哺乳類では、幼少期の母子環境や周辺の社会環境が、出生後のストレス応答に強い影響を与えていると考えられています。しかし当時、犬の成長において、幼少期の環境がどう影響するのかを明らかにした研究データがあまりありませんでした。そのため、幼少期の母子環境やパピー時の発達環境を観察し、成長後のストレス応答性と行動稟性との関係性を調べた研究が「犬におけるストレス内分泌の発達特性と行動の関連」です。

麻布大学とのこの共同研究で、盲導犬の育成において、幼少期の環境整備がとても重要であることが、明らかになりました。

東京大学 獣医動物行動学研究室 「盲導犬の早期適性予測に関する行動遺伝学的研究」

「盲導犬の早期適性予測に関する行動遺伝学的研究」は、犬の稟性に着目した研究で、盲導犬としての適性を早期に予測し盲導犬成功率の向上を目指すものです。盲導犬になるために重要な気質、つまり稟性を客観



2015年9月9日、北里研究所と医療現場における
動物介在医療に関する連携・協力の協定書調印式



2015年、東京大学大学院農学生命科学研究科との調印式。
良質な盲導犬育成へ向け、連携を強めていきます

的に評価して、信頼性の高い気質評価を確立します。そして、その気質にかかわる遺伝子多型を同定するなどを行い、盲導犬としての適性の早期予測を目指しています。

北里大学 北里研究所 「医療現場における動物介在医療の効果」

「医療現場における動物介在医療の効果」は、当協会の盲導犬PR犬「ハイク」と研究員のハンドラーがともに週1回、北里大学メディカルセンターの病棟を訪問し、患者さんと「ハイク」がふれあうことによる生まれ

る治療効果の研究です。具体的な症状の変化や医学的データを収集して、治療効果を実証しようとするものです。単なる治療補助ではなく、治療効果の実証を目指しています。

また普及推進部では、藤村真弓先生（元茨城キリスト教大学看護部長）の指導のもと、こども病院でのAAA（医療現場における動物介在活動）も実施しています。長期入院をしている子供たちへの支援を病院と協力して行っています。これにより医療現場の訪問が、盲導犬の新たな社会貢献活動の一つとして期待されています。

広告を通じてメッセージを発信し 住み良い社会の実現を目指す民間団体

AC ジャパン

社会に有益と思えるメッセージを広告媒体で発信しているACジャパン。

日本盲導犬協会は、2014年に「支援キャンペーン」に選ばれ、
テレビCMやポスターなどを通して、盲導犬の意義や理解推進、
そして、盲導犬とユーザーが安心して暮らせる社会の実現を訴えました。

よりよい市民生活のために 広告を通して社会にメッセージを

ACジャパンは、民間の企業・団体に会員社になっていただき、CSR (Corporate Social Responsibility) 活動の一環としてボランティアでの参加をいただいています。活動の仕組みの大きな特長はメディアからの広告枠の無償提供。そして広告会社からの表現アイデアの提案です。

ACジャパンが広告で取り上げる社会問題には、「公共マナー」「公共福祉」「環境問題」「親子のコミュニケーション」など普遍的テーマに加え、「認知症」「スマホマナー」「喫緊の医療問題」など、時代を反映したテーマがあります。広告を通してさまざまな問題提起をすることで、現状を少しでも改善していくことを目的としています。

また、その時々で公共の福祉活動に取り組む団体をバックアップする「支援キャンペーン」や、阪神淡路大震災、東日本大震災など、大災害発生時の「臨時キャンペーン」なども行っています。

ACジャパンは、当時サントリーの代表取締役社長だった佐治敏三氏が、アメリカAC (The Advertising Council) の活動を知り、日本でも同じことができないかと考えたことに始まります。佐治氏は「少しずつお金を出し合い、世の中のためになるメッセージを広告というかたちで発信しよう」と複数の企業に呼びかけました。この呼びかけに、114社の一般企業やメディア、広告会社が賛同し、1971年(昭和46年)にACジャパンの前身である「関西公共広告機構」が誕生しました。

2009年7月に、公共広告機構から「ACジャパン」と名称変更し、2011年(平成23年)に公益社団法人ACジャパンとしてスタートしました。

当協会が支援キャンペーンに選ばれ 盲導犬ユーザーとパートナーが出演

盲導犬の存在と意義を多くの人たちに知らしめることは、当協会の大切な活動の一つです。その取り組みの一つとして、2014年(平成26年)にACジャパンの「支援キャンペーン」に応募しました。

「支援キャンペーン」では、公共福祉に取り組む非営利団体がACジャパンの仕組みを利用してメッセージを発信できるのです。キャンペーンで選ばれると、1年間にわたり、テレビやポスターなどを使って、メッセージ広告を展開することができます。

当協会はその公共性の高さを認められ、ACジャパンの「支援キャンペーン」に選ばれました。そして2014年から2016年までの3年にわたり、盲導犬の意義と重要性を伝える広告を展開しました。

2014年の最初の広告では、世界的指揮者の小澤征爾氏がボランティアで出演、演奏楽曲も提供してくださり話題になりました。盲導犬とユーザーが、クラシックコンサート会場で小澤氏が指揮する音楽を楽しむ姿が映し出されたのです。これは盲導犬と生きることは、視覚障害者の世界を大きく広げることになるというメッセージを伝えたストーリーでした。広告に登場したのは、盲導犬ユーザーの須貝守男さんとパートナーのクロスです。

ACジャパンの調査によると、CMや広告を見た人で「共感した・やや共感した」とする人の割合が61.6%と支援キャンペーン9団体中最高という結果が出ました。

2015年の広告では、実際の盲導犬ユーザー鈴木加奈子さんと盲導犬ナンシーが出演。以前は、物や人にぶつからないよう気を使い、外出時は余裕がなかったとい



2014年ポスター「パートナーのいる幸せ」



2015年ポスター「削り絵」



2016年ポスター「盲導犬会議」

う鈴木さん。ナンシーと出会い、安心して歩くことができ、周囲の音や花の匂いなど、周りに広がる世界を感じられるようになったといいます。その体験を、削り絵という手法で表現した芸術的な作品となりました。

3年目となった2016年は、支援キャンペーン9団体中、日本盲導犬協会への応募企画数は55と最多となりました。その中から選ばれた「盲導犬会議」は、盲導犬が主役です。

これまでと大きく目線を変え、あえて盲導犬たちの言葉でメッセージを伝え、盲導犬の真の姿を社会に知ってもらうことを目指しました。実際の盲導犬とユーザーが5ユニット出演しています。「僕が来て10年ぶりに外出ができた」「カフェに入れてほっとしていた」など、今回の出演者とは異なりますが、実際にあった盲導犬ユーザーのエピソードをもとに構成されています。盲導犬と歩くことで自身の人生が大きく変わった、そんな体験を凝縮したストーリーになりました。

ACジャパンのご協力により「支援キャンペーン」に選ばれたことで、テレビ、ラジオの放送に加え、公共交通機関での広告や新聞などで、幅広くメッセージを発信することができました。広告を見た盲導犬ユーザーや一般の方から、当協会にたくさんメッセージが届き、その反響の大きさに驚かされました。

🐾 DATA file

名称：公益社団法人 ACジャパン
 所在地：東京事務局 東京都中央区銀座7-4-17
 電通銀座ビル
 代表者：理事長 藤重貞慶
 設立年：1971年設立、2011年公益社団法人化
 会員数：正会員1,066社、賛助会員46社、
 個人会員96人（2017年3月31日現在）
<https://www.ad-c.or.jp>